

ACRYLART

アクリラート別冊2013



The
Scholar 20
Perspective

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊2013



ごあいさつ

第26回スカラシップ奨学者20名の作品集ができました。今回の作家たちもさまざまな素材を使いこなし、独自の技法を取り入れて作品を作り上げています。

絵画材料は今では画材店で簡単に手に入り、絵具はキャップを空ければそのまま塗れる状態でチューブに入っています。画家は既に完成した絵具を用意して制作に向かうわけです。しかし、18世紀頃まで、絵具は画家の工房で若い徒弟が手練りしていました。絵画制作には絵具作りまで含まれていたのです。そう考えると、おなじ油絵具でも工房ごとに硬さや滑らかさが違っていたとしても不思議ではありません。各々の画家の、自分の好みに合わせて作らせた絵具の色調や質感が、そのまま画風に反映されていたわけです。

現代の流通商品としての絵具は、大量生産の事情や貯蔵安定性のため、ある程度画一化された物性になってしまっています。当然、既成の絵具に物足りなさを感じ、絵具を自作する人もたくさんいます。素材の研究も作家のテクニックの内ですが、そこで私たちは考えます。彼らアーティストたちをもっと満足させ、さらにインスピレーションを与えるような製品は提供できないものか。

産業革命を経て画家にとっての絵具のかたちは変わってきました。テクノロジーの加速する21世紀では工業製品としての絵具の製造技術はさらに進歩しています。常に最新のテクノロジーを駆使して、どこまで作家の望むものが作れるかが私たちの挑戦です。使う側として、より優れた素材を探し続ける作家たちとの共同の歩みが「ホルベイン スカラシップ」の活動であり、年一回発行されるこの作品集は、その記録でもあるのです。

2013年7月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The
Scholar 20
Perspective

Contents

第26回 燿学者 (五十音順)

伊藤歌奈子	ITO Kanako	12 · 34
内山 聰	UCHIYAMA Satoshi	13 · 37
大城夏紀	OSHIRO Natsuki	14 · 40
大西 久	ONISHI Hisashi	15 · 43
片野まん	KATANO Man	16 · 46
喜納洋平	KINA Yohei	17 · 49
熊谷直人	KUMAGAI Naoto	18 · 52
近藤亞樹	KONDŌ Aki	19 · 55
鈴木紗也香	SUZUKI Sayaka	20 · 58
高畠依子	TAKABATAKE Yoriko	21 · 61

茅根賢二	CHINONE Kenji	22 · 64
豊島 尚	TOYOSHIMA Takashi	23 · 67
長谷川一郎	HASEGAWA Ichiro	24 · 70
古川あいか	FURUKAWA Aika	25 · 73
三浦高宏	MIURA Takahiro	26 · 76
三井園子	IMITSU Sonoko	27 · 79
宮木沙知子	MIYAKI Sachiko	28 · 82
山路絃子	YAMAJI Hiroko	29 · 85
山田優アントニ	YAMADA Yu Anthony	30 · 88
山根一晃	YAMANE Kazuaki	31 · 91

The
Scholar20
Perspective

Works

第26回奨学者の作品



伊藤歌奈子

幕

キャンバス、油彩
103.0×130.0cm
2012年



内山 聰

soaked painting

パネル、キャンバス、アクリル

27.0×18.0×4.0cm

2013年



大城夏紀

展示風景

左 : attachment

パネル、麻布、油彩

36.5×51.5cm

2013年

中 : attachment_bolt

アクリル、金属、塗料

14.0×18.0×9.0cm

2013年

右上 : a downpipe bracket

綿布、油彩

22.0×27.5cm

2012年

右中 : a water tap

綿布、油彩

53.0×53.0cm

2012年

右下 : piece_03

金属、塗料

2.5×9.5×21.0cm

2013年



大西 久

庭へと続く道

キャンバス、油彩

194.0×162.0cm

2012年



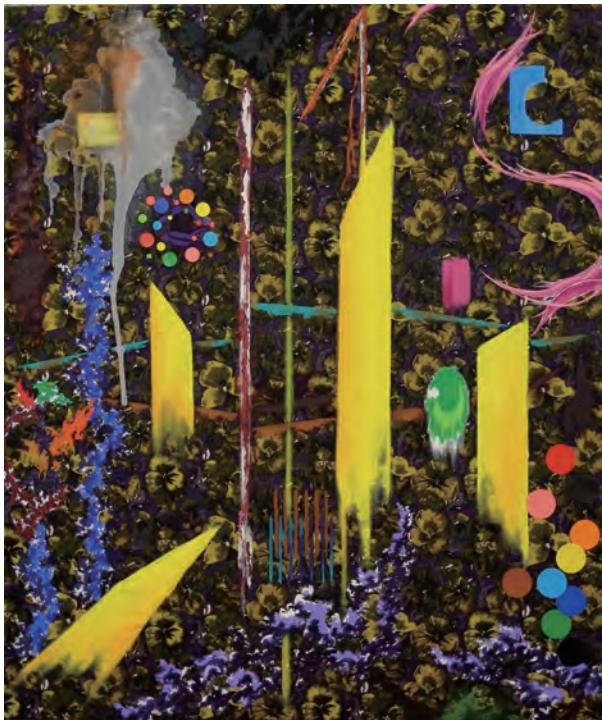
片野まん

「え！？今泳ぐときやろ？」

キャンバス、アクリル

145.5×112.0cm

2013年



喜納洋平

画像の庭(網膜)

プリント布地、アクリル、シール

72.7×60.6cm

2013年



熊谷直人

樹色

キャンバス、油彩

194.0×130.0cm

2012年



近藤亜樹

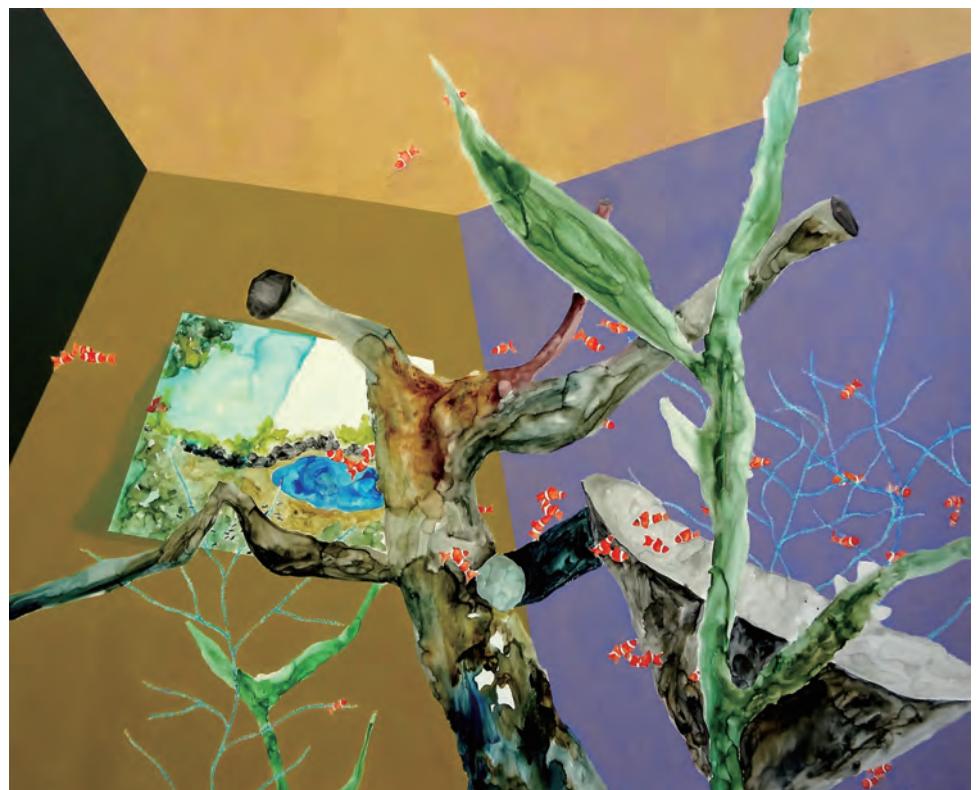
子牛と八角

パネル、油彩

227.3×181.8cm

2012年

photo by ShugoArts



鈴木紗也香

水槽

キャンバス、アクリル、油彩

130.0×162.0cm

2013年



高畠依子

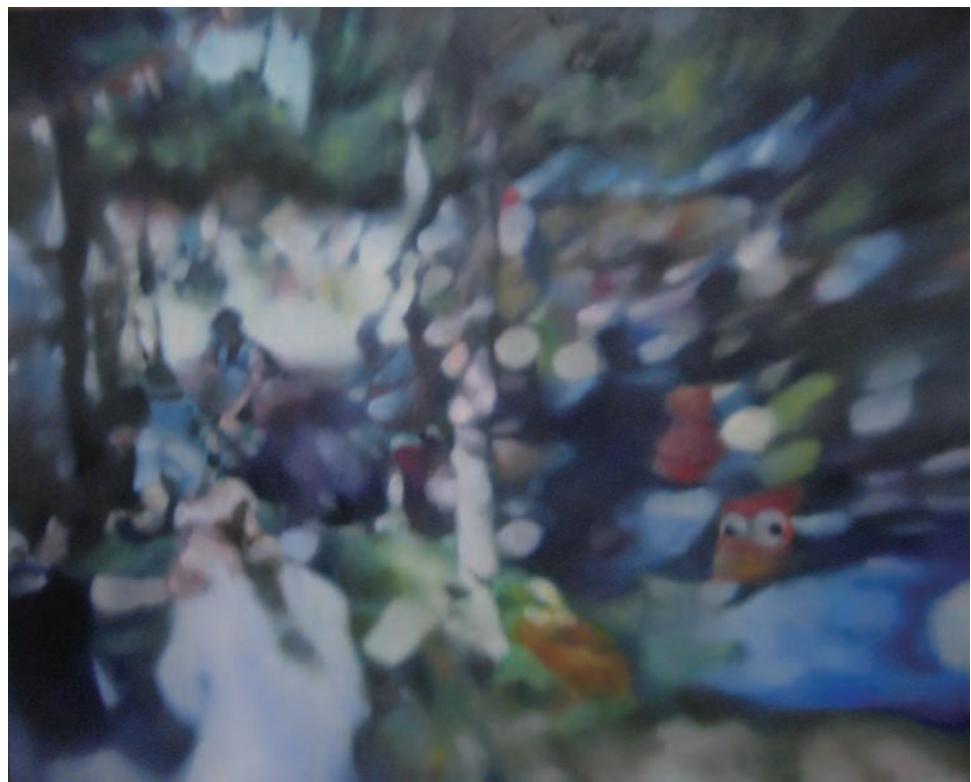
Yellow Moon

キャンバス、油彩、羽

80.0×72.0cm

2013年

photo by 加藤 健



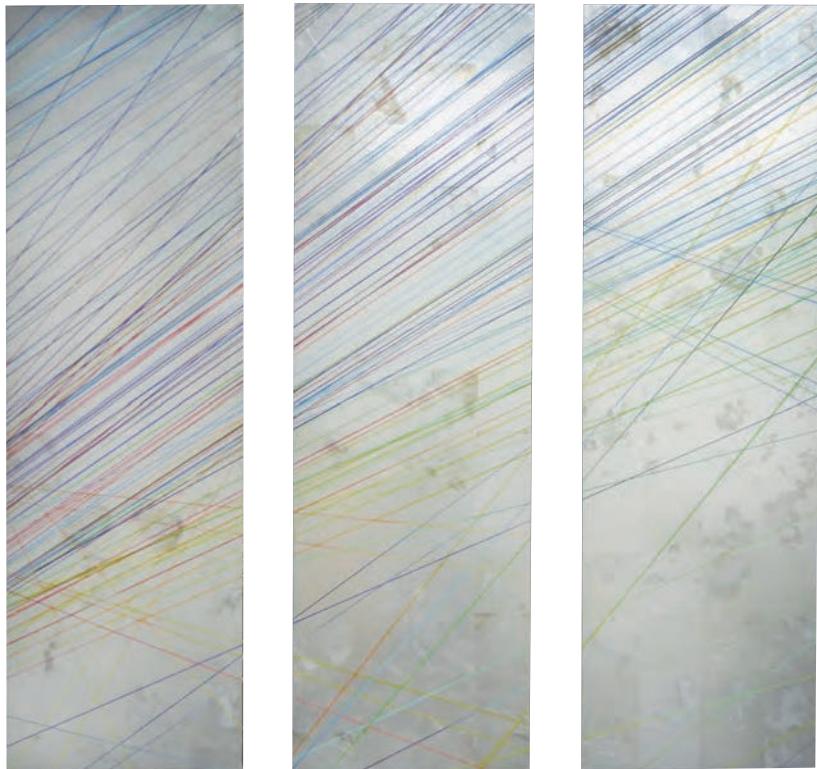
茅根賢二

Court

キャンバス、油彩

130.3×162.1cm

2013年



豊島 尚

Symphony

パネル、アルミ箔、アクリル、ポスターカラー

各160.0×50.0cm (3点1組)

2011年



長谷川一郎

Border

キャンバス、アクリル

72.7×90.9cm

2013年



古川あいか

夫婦のとぐろ（展示風景）

麻布、油彩

890.0×97.0cm

2012年



三浦高宏

瓶と赤子

パネル、エマルション地、油彩

162.0×130.3cm

2012年



三井園子

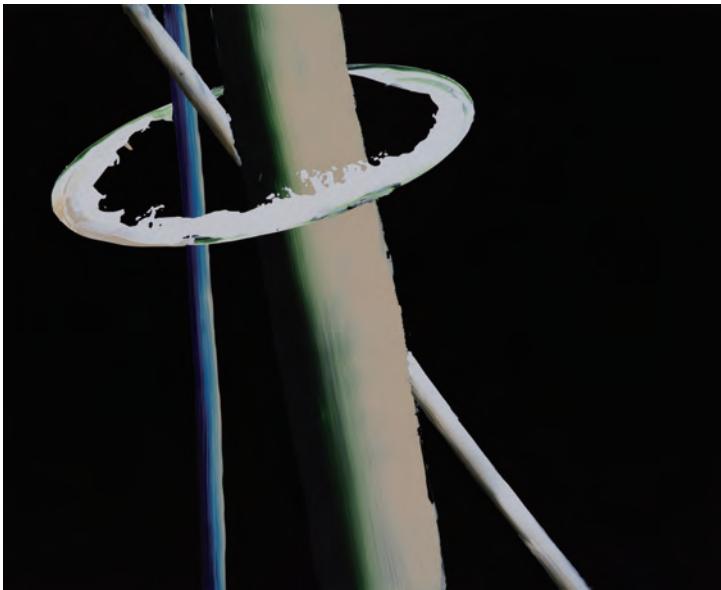
hanging i.e., connected

布、アクリル

170.0×80.0cm

2012年

photo by 豊七



宮木沙知子

隙間

パネル、アクリル

60.5×72.5cm

2012年



山路絃子

untitled

キャンバス、油彩

50.0×60.0cm

2012年



山田優アントニ

static electricity

キャンバス、油彩

53.0×45.5cm

2013年



山根一晃

ホーキードンテ

布、油彩

200.0×150.0cm

2013年

The
Scholar20
Perspective

Report

第26回奨学者のレポート

伊藤歌奈子

ITO Kanako

誰の視点でもないところ

この世界がなにか舞台のように思えてくる。舞台を観察するようこの世界を観察してみる。

舞台の形状について。人間の形式について。観客の有無について。舞台を設置した存在について。舞台の存在理由について。舞台を認識してみる。

どれだけ私たちは踊らされているだろうかといつも考えてしまう。

印象的な景色やひかりの残像、ものの動きの瞬間を描いている。感傷や感情を伴わずに、客観的に、自己すら存在しないくらいに客観的に、想定する誰の視点でもないところから観察すること。時間を止めることによってそれがどういう状況になっているのか、そのものがどうなっているかを考察すること。知ろうとすること。それらを形として抽象化、象徴化して残そうとすること。あるものがある場所に存在した事實を残そうとすること。感覚的に捉えて感覚的に描くこと。

そんなふうに抽象化、象徴化して描いて

いくと、見たままの風景ではなく、まったく別の風景が立ちあがってくる。描いている間に、新しい形や景色がうまれてきたりする。

そして自分でも思ってもみないものがでかける瞬間がある。とても不思議である。それは結局自分のフィルターを通して描かれらからそのようなものが出てくるということもあるが、それとは別に、まったく想定していないものが画面に現れてくることがあるのだ。

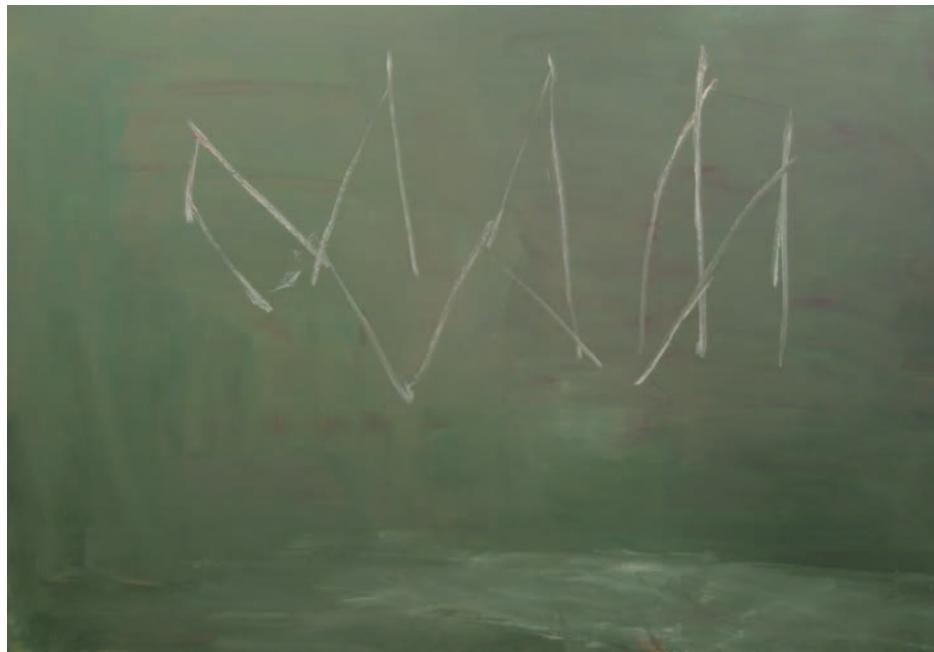
しかし自分が描いていることであるのに、自分でも想像しない形や景色が描かれるのはどういうわけなのか。考えてみれば絵を描くこと自体、私には不思議なことである。目からの情報と脳内の思考が、神経と手と筆を通して、絵の具によつてキャンバスに何事か現れてくる。物質と非物質がないまぜになつて、なにか別のものがうまれる。それが唐突な感じがするのだ。

自分ではないものが描いているような感覺になる。それがとてもおもしろい。現れたそれは、私をも介在していない風景のように感じる。いつたい誰が見た景色なのか、

そんな景色を見たくて絵を描いている。



終演
キャンバス、油彩
77.5×95.0 cm
2012年



舞台
キャンバス、油彩
114.0×163.0cm
2011年

伊藤歌奈子

1984年 愛知県生まれ
2009年 名古屋芸術大学美術学部絵画科洋画コース卒業

個展

2012年 Gallery Introart／愛知
2011年 Laboratory GALLERY GOHON／愛知
Gallery Introart／愛知
2010年 Gallery Introart／愛知
Gallery Introart鳥取／鳥取

グループ展他

2012年 MOTION 名古屋市民ギャラリー矢田／愛知
View アートラボあいち／愛知
ART KYOTO ホテルモントレ京都／京都
密度Ⅲ アートラボあいち／愛知
2010年 ARTman 豊田市美術館市民ギャラリー／愛知
journey junction 名古屋市民ギャラリー矢田／愛知
2008年 はすむかいのシナブス 名古屋市市政資料館／愛知

絵の前で働いていたいのである。

例えば、例えればね、100kg以上もある牛を描いていて、その牛を描くのに100kg以上の絵の具は使わないよね。

これはかなり極端な話だけど。どちらかというと僕は使わなきやいけないんじやないか? 使う可能性もありうるよって思つちやつて。単純に絵の具の質量を盛り込むつて意味だけじゃなくて、彼(牛)の生命や生きてきた時間に代わる物理的な影響、説明、労働が必要なんじゃないか? 重さの話だけじゃなくて牛の空間占量や生命に代わる、「実際」に関わる何かが必要なんだろうつて思つてた。(絵画は平らだから色々な事が無理)。よく言えば描いているものが僕だけにはここにいるように見えてる。悪くいうと絵が下手な人。

ところが写生が上手い人とは違うではない、まるで100kgのものがいるかのようになんか思つていたよりペランペランじゃね?みたいだ。

一方ではアルバイトで美大受験予備校の講師なんかもやつていて、自分と同じ苦労(そんな奴あんまりいないけど)はして欲しくないから、そのテクニックを徹底的に指導する訳。

もともと頭の中のイメージ(モチーフでもよいが)と写生の完成というのは食い違うのが当たり前という事を誰も言わないし、それを言う事はこの絵画は「私が描くにあ

だつて絵なんだから。

断することが第一。鑑賞者の目に映るシステムをまず知つてて事つていうか:

作り手なら電撃が走ったようにシステムを理解した経験とかはあると思うんだけど、幸か不幸か僕はこの大いなる勘違いをある瞬間にバチッと理解したんだ。けれどモチーフをうまく画面に描けなかつた時期が長かつたから、モチーフを見て絵画の中にものを現す瞬間の力学、テクニックみたいなものに何か嘘くささみたいなものを感じていたのね。

たつて思つたもの」ではないんだよという事でもあるから。

だつて絵なんだからさ、とりあえず脳内の映像化みたいな事ではなさそうだよ。

今は僕の絵を描き始めた頃のつまづきみたいなものが、実は絵のお約束というか能力というか特性みたいなものを含んでいる気がしてる。で、僕は牛の絵は描いてないし、また具体的なものを描いてるわけじゃないんだけど、絵の前で「実際」に体を動かしている。絵の前で働いていたいんだよね。



soaked painting
パネル、キャンバス、アクリル
27.3×18.5×4.5cm
2013年



It's growing up
紙テープ、裏打ち紙、他
170.0×170.0×2.0cm
2011年

内山 聰

1978年 神奈川県生まれ
2001年 多摩美術大学美術学部絵画学科日本画専攻卒業
2005年 多摩美術大学大学院美術研究科日本画専攻修了

個展

2012年 タイムマイム ギャラリー現／東京
soaked paintings eitoeiko／東京
2011年 クイックピック Gallery HIRAWATA／神奈川
2010年 レック、保存、リピート、再生 ギャラリー現／東京
ピク、ギュア、ペイン、チュア STREET GALLERY／兵庫
2008年 おくの手 ギャラリー現／東京
2006年 像 Gallery HIRAWATA／神奈川
像 ギャラリー現／東京
2005年 情報と誤解 ギャラリー現／東京
2003年 HALF アートスペース羅針盤／東京

グループ展他

2013年 吹きよせの落ち葉の中にひとひらの Gallery OUT of PLACE／奈良
2012年 Melting Core Gallery OUT of PLACE／奈良
2010年 over tone 2 美術の地上戦 神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
2009年 中之条ビエンナーレ2009／群馬
hyper tension with uneasiness 海岸通ギャラリー・CASO／大阪
2008年 THE NEXT Gallery Stump Kamakura／神奈川
TAMA VIVANT II 2008 -イメージの種子- 多摩美術大学キャンバス／東京
2007年 エアメールを受け取る手 Gallery Stump Kamakura／神奈川
2006年 百花撩乱 ポイスプランニング／東京
2005年 TAMA VIVANT 2005 -美術そのひろがる輪郭- 東京展－多摩美術大八王子キャンバス絵画東棟ギャラリー／東京、みなとみらい展－みなとみらい駅地下3階コンコース／神奈川
2004年 ピエゾ博士の展覧会 アートスペース羅針盤／東京
隣人 アートスペース羅針盤／東京

大城夏紀

OSHIRO Natsuki

私はいま、ここにいます。

私の下には、一面の床があり、両側には

それぞれ一面の壁が続いています。

その時、私にとつての世界は、床と壁
がすべてです。

「床」と「壁」を認識することで、世界す
べてを了解したことになります。

けれども私は、なぜだかどうしても現実
感をつかむことができません。

$$A + B = C \text{ を反芻する}$$

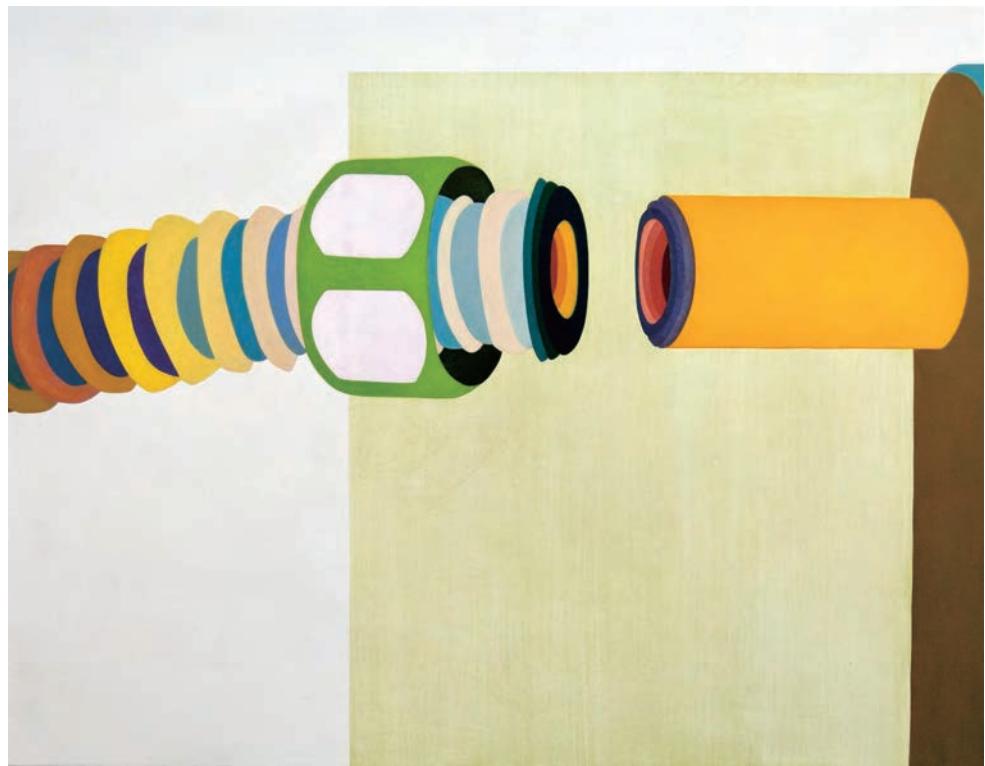
私にとつて絶対的に見えていた床と壁は、
実際は人が作ったものです。
木片を組み合わせて枠を作り、板を張り付
け、壁紙で覆つたものでした。
私は、「壁」という名前を付けることでそれ
らを“分かつた”つもりになっていたので
す。

現在は、日常を構成するパツツとして、
構造部品に焦点を絞っています。個人の視
点からひとつひとつを検証していくことで、
やつと、私は自分が今いる場所、床、壁、
いまここ、に対してリアリティを感じるこ
とができるのです。

既存のもの／既定の事実に対し、疑い
を持たずに前提として受け入れることは
多々あります。

生活
社会的ルール
言葉
記号
文化
建築物
そして絵画

そのひとつひとつに確信を持つことで、
世界に対するリアリティを得ることができます。
るのではと思いつくり制作しています。



a water pipe

パネル、麻布、油彩

91.0×116.7cm

2013年



EWK
綿布、油彩
65.0×53.0cm
2011年

大城夏紀

1985年 東京都生まれ
2008年 早稲田大学第二文学部卒業
2010年 阿佐ヶ谷美術専門学校絵画表現科卒業
2012年 東京造形大学大学院造形研究科美術研究領域修了

個展
2011年 風景の発見 CSギャラリー（東京造形大学）／東京

グループ展他
2011年 Mボリューフォニー まるさんかくしかく ZOKEIギャラリー／東京('10)
Art Polygon NHKふれあいホールギャラリー／東京
2010年 アートプログラム青梅 2010 青梅市街／東京
選抜展 人形町Vision's／東京
2008年 ターミナル 文房堂ギャラリー／東京
2007年 9.3 なかのZERO なかのZERO／東京
鮮緑展 早稲田大学学生会館ホールギャラリー／東京 ('06)

喚起するもの

わたしは見慣れた風景のなかに潜む形に魅せられます。それらに共通していいるものは人工物や自然物、あるいは素材などとは無関係なようですが、

ただ、確かにのは单一の物の形ではなく、周囲の物たちと併存している光景のなかにその形が現れてきます。

わたしは歩いているときにふと気になつた（その感覚を喚起させるものが何なのか、いまもなお分からぬままですが）光景を写真に撮ります。そして、撮り続けた多くの写真から、ある感覚をもとに選び、形を抜き出していくます。

鉄柵、コンクリート製の側溝、木々やらゆる影などが、それらの担わされた役割、纏ったイメージや素材感とは全く関係なく連続した形として浮き出します。すべては等価なものとしてそこに在ります。

風景から切り取られたそれらの断片（そのままでは不完全な、未熟な状態）から固有の色や素材感も剥ぎ取り、例えばアルビ

ノに見られるような無防備で脆弱な状態のまま画面に移していきます。画面のなかを漂うことによって断片はさらに純化され、周囲の空間との関わりのなかでその位置を定めていきます。

画面が進むにつれて断片と周囲の空間が浸透しあつていくように感じます。それはまるで真水と海水が混じり合う汽水域が多様な生態系を育むように予想もしない広がりや様々な風景を生み出します。

いつも、画面が見る人の五感を呼び覚ます開かれた空間であつてほしいと思います。



柵
キャンバス、油彩
162.0×194.0cm
2013年

境界の風景
キャンバス、油彩
162.0×194.0cm
2010年
photo by 末正真礼生



大西 久

1967年 兵庫県生まれ
1990年 大阪教育大学美術教育専攻卒業
1992年 大阪教育大学大学院美術教育研究科修了

個展

2013年 コバヤシ画廊／東京（銀座）にて10月21日～26日迄開催予定
2012年 コバヤシ画廊／東京（'09、'10）
ギャラリー猫亀屋／大阪
2008年 西脇市岡之山美術館／兵庫
清須市はるひ美術館／愛知（'03）
2007年 ギャラリー21+葉／東京
2005年 ギャラリーGAN／東京（'03）
2004年 アトリエ西宮／兵庫（'03）
2002年 ギャルリー・ウー／大阪
アートスペース羅針盤／東京
2001年 ギャラリー白／大阪（'91～'93、'95～'99）
1999年 激空間／兵庫
1994年 信濃橋画廊／大阪

グループ展他

2011年 アイチ・ジーン 清須市はるひ美術館／愛知
2008年 あさご芸術の森大賞展 あさご芸術の森美術館／兵庫（'06）
2007年 知覚の稜線II - 大阪教育大学からの発信 - 海岸通ギャラリー・CASO／大阪
夢広場はるひ絵画ビエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知（'03、'05）
2005年 ペインタリネス ギャラリー白／大阪（'96、'01）
ホッとCITYいなみ野七人展 稲美町立ふれあい交流館／兵庫
2004年 VOCA展2004 現代美術の展望 - 新しい平面の作家たち - 上野の森美術館／東京
次代の作家たち 清須市はるひ美術館／愛知
現代作家の眼・クロスオーバー10展 岡山県総合文化センター／岡山
2002年 第4回サムホール大賞展 西脇市岡之山美術館／兵庫
現代日本絵画展 宇部市文化会館／山口（'00）
2000年 「善住芳枝・大西 久」展 アトリエ西宮／兵庫
1997年 兵庫の美術家 兵庫県立近代美術館／兵庫（'93）
1994年 イメージの鍛練 ギャラリー白／大阪
1992年 「永原富洋・大西 久」展 信濃橋画廊／大阪

片野まん

KATANO Man

努力家の色

色彩は時間を喚起させる。ノスタルジーだけではなく、時代、時期、自分の姿、立ち振舞い、好んで食べていたものなどをも。学生時代からお世話になつたホルベイン、モダニズムの巨匠たちの絵画を眺めながら、自分と、近代以降の日本の『色』はティル・ゲイトでシンクロしていると感じる。もはや、やつている側の目的もゴールも関係なくなってきたところも同じだと思う。

芸事は土地の文化と自然を反映するが、それだけではない。人間は自分だけをただ見つめて暮らしているのではない。そこが現在までの油絵具やアクリル絵具などの舶来マテリアルと日本人との二律背反とも一致している。だから日本製の画材には親近感を感じている。

オリジナルであること。一点ものであること。絵画の売り文句はそれだが、未だかつて日本人である我々個人が一点ものの個となり得ず、また日本や日本人における何がしとは決して『日本の』なるものではない。そういった諸々の箱書きは断じてイメージとはなり得ない歴史である。従来の日本の

描くとやはり当時がフラッシュバックしてきた。当時から現在まで未だに手探り状態の自分と、近代以降の日本の『色』はティル・ゲイトでシンクロしていると感じる。もはや、やつている側の目的もゴールも関係なくなってきたところも同じだと思う。

芸事は土地の文化と自然を反映するが、それだけではない。人間は自分だけをただ見つめて暮らしているのではない。そこが現在までの油絵具やアクリル絵具などの舶来マテリアルと日本人との二律背反とも一致している。だから日本製の画材には親近感を感じている。

今回のスカラシップは、ホルベインから「俺たちが作ったんだ、使ってみるよ！」とぽんと投げられた製品を受け取つて「じゃあそうさせてもらいます」といつた関係性が大変心地よい。メーカーが受身ではなくプッシュしている気がするからだ。勿論、最大級の評価としてこちらはありがたく使

なるもの、工芸や日本画などのイメージをコンバインし寄生するは妄想である。考えることを辞めただけ、だ。

日本の油絵も油絵具も、そこを永年考えてきた、考へておられるだろう。ただ実作でなく製品でなくこのようなイメージに漂ううちにはダメである。そこをすっぱりと断ち切らねば先はないだろう。

実制作において必要なものをつくればよいし、現場に必要なものを描けばよい、のである。だがここで作家の声を聴き、現場にない間隙を突く作品を描く、のでは手遅れである。流行の最後列を追うと同じである。輸入洋書の画集を片手に画室に籠るのと同じである。もつと静かに進行させねばならないことは沢山ある。

わせて頂いている。

絵の実体以外の妄想からすっぱり断ち切れてしまわないと何も始まらない、今がその時であるのだ。2013年が今、ではない。今は今なのだ。1929年1月1日も1850年の今日と同じ日も過去の今だ。【今】への認識が近代以来、日本人には決定的に欠けている。そしてチャンスを逃し続けている、のだ。

腕立て伏せは腕を伸ばし、上体が上がった地点で『1』である。決して地面に一番近いところでではない。明治時代ではなく平成の絵は、上がった地点で『1』をカウントしているのか？『2』はどこでだ？

1／2秒先に『1』をカウントする声が、上体が上がりず1／2秒遅れの反響音に終わるか、『1』の正カウントになるか、今、妄想はすっぱり切り捨てて独り静かに進行する時ではないか。



マリア（受胎告知）
キャンバス、アクリル
60.6×72.7cm
2012年
photo by Kenryu Tanaka



JFK (人文字)

キャンバス、油彩

145.5×336.0cm

2007年

photo by Kenryu Tanaka

片野まん

1968年 大阪府生まれ

1989年 京都市立芸術大学美術学部美術学科油画卒業

1990~91年 英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アートに交換留学

1991年 京都市立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了

1996~97年 文化庁芸術家在外研修員としてイギリスに滞在

個展

2013年 Quo Vadis? Domine MORI YU GALLERY TOKYO／東京

2012年 構造改革反店 MORI YU GALLERY KYOTO／京都

2010年 「2010」 MORI YU GALLERY TOKYO／東京

「2010」 MORI YU GALLERY KYOTO／京都

2009年 Golden age MORI YU GALLERY TOKYO／東京

The modern a.k.a. god MORI YU GALLERY KYOTO／京都

2004年 ギャラリー・ズィガ／リヴィヴ [ウクライナ]

2002年 ヤズゴット・ワルシャワ／ワルシャワ [ポーランド]

2001年 ギャラリー・そわか／京都

1997年 ACME アーティスト・スタジオ／ロンドン [U.K.]

1996年 ABCギャラリー／大阪

1995年 大阪府立現代美術センター ブリティッシュ・カウンシル京都／京都

グループ展他

2010年 絶対異質的自己同一 II MORI YU GALLERY TOKYO／東京

MORI YU ARTISTS DRAWING MORI YU GALLERY TOKYO／東京

2008年 「うひょ～！！！」 MORI YU GALLERY TOKYO／東京

夜明け前 MORI YU GALLERY TOKYO／東京

絶対異質的自己同一 -新しき平面- MORI YU GALLERY TOKYO／東京

BLUE GARDEN MORI YU GALLERY TOKYO／東京

百花京乱 MORI YU GALLERY KYOTO／京都

UNDULATIONISM IV -遊歩- MORI YU GALLERY KYOTO／京都

2007年 グループ展 ガレリア・カロヴァ／ワルシャワ [ポーランド] ('06)

1997年 Pusteblume ギャラリー・アンドレア・ラウシュ／ハンブルク [ドイツ]

1996年 キリン・コンテンポラリー・アワード「反重力音楽ジョニー」 キリンプラザ大阪／大阪

1995年 絵画の方向 大阪府立現代美術センター／大阪

ロッケン壁画展 by N.C.M.K.F 京大西部講堂／京都

1993年 キリン・コンテンポラリー・アワード「軽絵画の素晴らしい世界」 キリンプラザ大阪／大阪

1989年 N.C.M.K.F ギャラリー虹／京都

アート・ライン89 大阪府立現代美術センター／大阪

キヨウト・はんなりズム スペース・NIKI／東京

デザインをやるつもりで学校に入つたけど、なぜか現代美術の世界へ。たぶん魔が差したんだと思う。

すテーマって関係ないんじゃないかな。
それに芸術なんてほとんど死語だから、
それを目的にするなんて世間じや無価値で
無意味だし。

最初はインスタレーションやパフォーマンス、映像から始めて今は平面作品。『絵画』って言えないのは、真っ白いキャンバスから始めるんじゃなくて、柄のプリントされた布地にちよこちよこ描いているから。

ゼロから始めるんじゃなくて目の前にあるものに反応して手を加えていく感じ。

だから大体画面の半分くらいしか描かない。自分で全部描くわけじゃないから、ちよつとインチキに見える。

でも、インチキにみえるところが気に入っている。いつも真実ばつかりじや疲れるでしょ？

ずっと芸術をやりたいって思いはある。
でも、テーマってあんまりない。色んな物
や事があつて、その時々で反応しているだけ。それが社会や歴史だつたりすることは
あるけど。

自己表現つてわけじゃないから、ますま

意味や価値なんてなくてもやつてこれた
し、これからも続けていくんだと思う。き
つよね。

のこと



画像の庭（樂園）
プリント布地、アクリル
145.5×268.2cm
2012年



パースペクティヴ (blue)
刺繡された布地、アクリル
80.5×60.5cm
2011年

喜納洋平

1979年 東京都生まれ
2004年 東洋美術学校卒業

個展

- 2013年 人形町Vision's／東京（日本橋堀留）にて10月1日～12日迄開催予定
2012年 トキ・アートスペース／東京
2011年 トキ・アートスペース／東京
2009年 トキ・アートスペース／東京
2008年 トキ・アートスペース／東京
2007年 トキ・アートスペース／東京
2006年 トキ・アートスペース／東京
2005年 トキ・アートスペース／東京
2004年 ギャラリー山口／東京

グループ展他

- 2010年 interactive V ギャラリー檜／東京
2009年 EXPERIENCE OF CLOSENESS contemporary art scene from Serbia トキ・アートスペース／東京
2007年 Lolly pop-Body & Consumption ヴォイヴォディナ現代美術館／セルビア

描くということ

私は1999年頃から現在まで植物をモチーフとした絵画作品を制作してきました。自分が美しいと感じるものや気になるもの、題材に絵を描き、時には自分の描いたその絵にどこかしつくりこない違和感を感じ、それを踏まえまた新たな絵を描く、というようなことを10年以上繰り返してきました。その間には私自身、制作や日常の中での様々な体験を通して「表現すること」や「美しさ」や「世界」等に対する考え方方が少しずつ変化し、それに伴って私のつくりだす作品の様子も変化してきました。それでも植物というモチーフは現在も相変わらず私の作品制作の中心に存在しています。とはいっても私は10年以上もの間、常に同じ目線、同じ価値観で植物という存在をとらえてきたわけではありません。それぞれの時期において私の植物に対する興味もやはり様々に変化してきました。そして現在、私が作品のモチーフとしているのは植物のもつ有機的な形や色彩や質感等を通して感じるその存在感です。これは植物を目の前にした時に私が感じる特別な印象のことと、それをもう少し私なりの言葉で具体的に表現す

ると「生きているという事実がそのまま具現化したような特別な感触」あるいは「存在の必然性」などと言うことができます。そんな植物のもつ固有の存在感に私は特別な魅力を感じていて、それを基に作品を作ることでなにかとても美しい作品ができるのではないかと考えているのです。

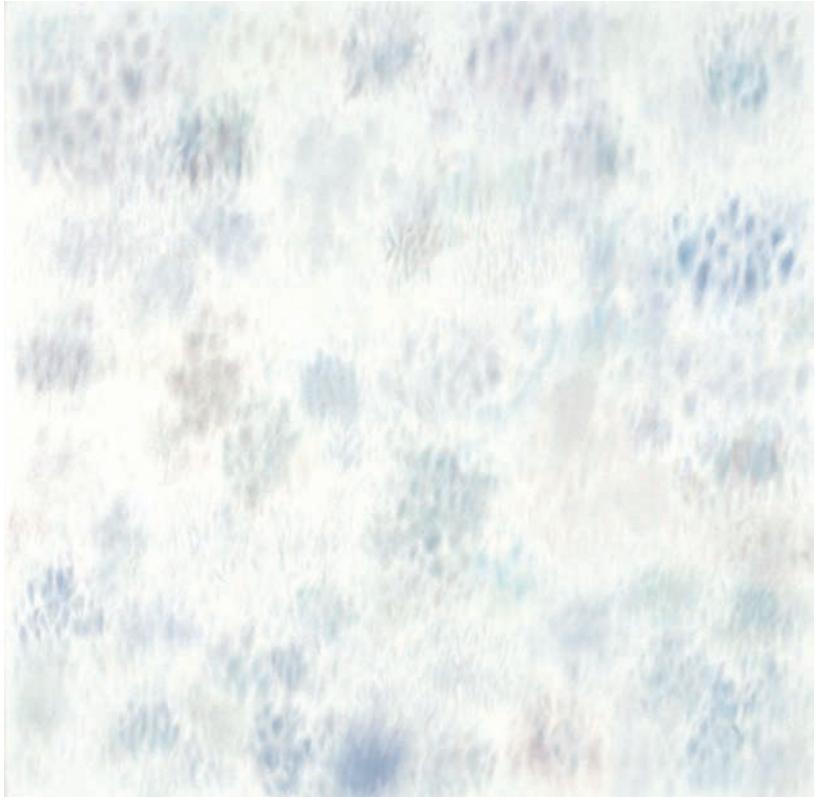
植物はとても複雑で魅力的な形や色、質感を持つていますが、私はそのような植物の姿形を単に目に見えるままに写し描くのではなく、植物の生成していく過程を作品の制作過程に関連付けようと試みています。それは、一粒の小さな種子が自らの置かれた環境に即して茎をのばしたり葉を茂らせたりという風にその様態を序々に変化させ植物固有の姿を生み出していく、といった植物の生成イメージを基に作品制作をするということです。つまり「植物の在り方」をモチーフとしてとらえ、作品を植物のように生成させることで作品の存在 자체を植物のようにしていこうと試みているのです。

私にとって作品制作とは、モチーフであ

る植物を媒介として世界に触れる時間の中で、自分や世界、あるいはその両者の関係について思考を巡らせ心身を実際に動かすことで作品を生み出す行為です。そしてそれは、自分自身や自らの作品、そして世界に対して私が感じている多くの「わからなさ」を受け止めて、その中を前進していくことでそれらの様々な「わからなさ」の実態に僅かでも触れようとする試みの実践でもあるのです。



花
キャンバス、油彩
41.0×41.0cm
2012年



森

キャンバス、油彩
194.0×194.0cm
2010年

熊谷直人

1978年 東京都生まれ
2003年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
2011年 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻修了

個展

2012年 アートフロントギャラリー／東京
2011年 gallery Teo／東京
2010年 東京オペラシティアートギャラリー 4Fコリドール／東京
2009年 gallery Teo／東京

グループ展他

2011年 SCENE1 TIME&STYLE<TOKYO MIDTOWN>／東京
台東区コレクション展 東京藝術大学美術館／東京
2010年 10Flowers GANZO／東京
2009年 キャラバン隊『陣をたため！出発だ！愛と希望とカオスのもとへ！』キャラバン隊美術部 plan of Mitonoya なびす画廊／東京
2008年 leaves Gallery Murata & Friends／ベルリン [ドイツ]

<http://naotokumagai.com>

近藤亜樹

KONDO Aki

私は想像をすることが何よりも好きだ。

なければ意味がない。

言葉という確かなものではなく、ほんやりと頭の中に一瞬浮かぶ、シャボン玉のよう

に現れてはすぐ消えてなくなってしまうく

らいの妄想。

世界はたくさんのきれいな色と、そうじや

それは現実というものの中から必ず生まれてくる。

それは嬉しいときかもしれないし、悲しいときかもしれない。

だから私は何枚も何枚もそれが逃げてしま

う前に絵で記憶している。

残念ながらそれは自分の心にも長くはとど

映画のカットをいくつも編集してつなげ一

まってくれないが、季節が変わるように、

本の作品にする感覚に近いのかかもしれない。

いや、天気が変わるくらい短くて不確かなものだからいい。

それは完璧な嘘であるが、その世界にも必ず

それが絵として残ったとき、そこにどんな意味があったかなんて覚えていなくとも、言葉にならない声が聞こえてくるものであ

ればそれでいい。

生きていて毎日同じということはないのだから、大きい声で何かを話したいときは大きな筆でのび書きたいし、だれとも話

今見ている色は、この地球を照らす光である。だから宝石のように美しいのだ。

したくなかった時は細い筆で小さい絵を描いた

私にとっての絵は、頭で考えるものでなく

ただひとつ自分で決めているのは、心

が動いているときに筆を持つこと。そうじや

最期の日まで光を浴びるよう絵画のまえ

に立つて
いたい。



家族の肖像

パネル、油彩

227.3×363.6cm

2011～2012年

photo by ShugoArts



少女のひみつ
パネル、油彩
53.0×41.0cm
2011年
photo by ShugoArts

近藤亜樹

1987年 北海道生まれ
2010年 東北芸術工科大学洋画コース卒業
2012年 東北芸術工科大学大学院実験芸術学科修了

個展

2012年 たべる地球 ShugoArts／東京
2010年 おひさまプール Enoma／宮城

グループ展他

2012年 PHANTOMS OF ASIA: Contemporary Awakens the Past Asian Art Museum／サンフランシスコ [U.S.A.]
2011～2012年 4人展 - 絵画 - ShugoArts／東京
2011年 GROUP SHOW imura art gallery／東京
2010年 NIPPON ART NEXT 2010 外苑キヤンバス／東京
わかてん AYU:M／山形
IWAKI ART トリエンナーレ2010 いわき市／福島

鈴木紗也香

SUZUKI Sayaka

内から外を眺めること。

私は普段「自分とは何者なのか」という普遍的な問いをテーマに描いており、自己の内在性と他者との関係を探ることを目的としている。

そのメタファーとして自己のテリトリーである家と外の世界をモチーフとして選択し、その両者を「窓」を通して垣間見る絵画を描いている。

また、家のモチーフとして子供部屋を扱うことが多い。なぜなら子供部屋とは、自我が芽生え、物心が付いた時に初めて得る自分がだけの空間だと認識しているからである。

テーマの方向性を見出してから制作し始めて4年近くになる。変わらず家中から窓を介して外の世界がある絵画を描いているが、内容は変わらずとも少しずつ何かが変わっている。描いている時は全くわからないのだが後に作品を見返して過去の自分の分析をすると意外と変化があるものである。理論がその時の感覚をばり言いで当てているのかはわからない。しかし理論より先に感性とは違う意味で無意識の感覚が絵画に表れてくるものである。そしてそ

の直感は大抵信用できるものである。

自己的理念における象徴性を「絵画」を通して表現することにおいて現代も変わらず絵画的要素がかなり重要な要素になつてくる。表現の多様性が認められている現代だからこそ尚のこと基盤となる絵画性が重要な要素であると思う。頭でコンセプトだけを理論づけて練つては浅いものになつてしまふのである。自己の理論を超越した「何か」が非常に重要な要素であることは作家なら誰でも直感的に知つているだろう。

このホルベイン・スカラシップのレポートで私が一番訴えたいことは画材に対する認識の変化である。

子供部屋のイメージから制作初期はパステルカラーを用いることが多かつた。特に薄いクリーム色をほとんどどの作品にも使つている。暖色でも寒色でもないクリーム色は淡々とした柔らかさを主張できると思ったからである。

しかしそれから1~2年経つた後、徐々に私はパステルカラーの壁から深みのある色合いを好みようになつた。元々、絵の具を

扱うのが苦手で色をほとんど混ぜずにチューブからそのまま取り出した色を使つていったが、大量にアトリエに届く絵の具をどう使おうか悩んでいた時、大きなサイズを描くようになり慣れてきたのか、パステルカラーの軽さに飽きてきたのか、色を混ぜて暗いものを画面に使うようになつたり、分厚い絵の具の層を絵画の中に取り入れるようになつていった。

今まで絵の具や専門的な画用液に苦手意識を抱いていてつい無難なやり方に逃げていたが、今回の獎学品のおかげで思い切り絵画と奮闘することができ、自身の作品が一步進めたと思う。

私は絵画性において新しい形式を確立したいわけではない。アヴァンギャルドによつて道が切り開かれる時代ではないからだ。ただただ「対　自分」なのであると思う。

社会性や時代性を踏まえた上で他者を念頭においた客觀性も作家には必要だが、ぎりぎりのところの決断はやはり自分を信じて行わなければならぬ。キャンバスは作者の内面の鏡である。答えは全てそこに描いてある。



あの日の眠りは確かに熱を帯びていた
キャンバス、布、アクリル、油彩
227.0×370.0cm
2012年

明日
キャンバス、アクリル、油彩
145.5×145.5cm
2011年



鈴木紗也香

1988年 イギリス生まれ
2012年 多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業
2013年 多摩美術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画研究領域在学中

個展

2013年 ギャラリーQ／東京
2012年 ギャラリーQ／東京
2011年 another scenery -半透明の薄い膜と耳障りな沈黙達- トキヨーワンダーサイト本郷／東京

グループ展他

2013年 VOCA展2013 現代美術の展望-新しい平面の作家たち- 上野の森美術館／東京
ART Meeting 展 銀座三越／東京
Light & Blindness Maki Fine Arts／東京
アーツチャレンジ 2013 愛知芸術文化センター／愛知
2012年 Expected Artists 2012 Shonandai MY Gallery／東京
東京五美術大学連合卒業制作展 国立新美術館／東京
ART in LIFE 銀座三越／東京
多摩美術大学卒業制作展 多摩美術大学／東京
風景の気配 新宿眼科画廊／東京('11)
TAMA VIVANT II 点在する自分、あるいは… 多摩美術大学、パルテノン多摩／東京
トキヨーワンダーウォール公募入選作品展 東京都現代美術館／東京('10)
2011年 The 3rd COREDO Women's Art Style コレド日本橋／東京
Emerging Artist 2011 今の絵画展 ギャラリーQ／東京
ワンドーシード トキヨーワンダーサイト渋谷／東京('10)
ららぽーと東京オフィース・アート・エクスピジョン 浜町センタービル／東京
第4回アーティクル賞 TURNER GALLERY／東京
シェル美術賞2011 代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2010年 Presentation & Exhibition アートコートギャラリー／大阪
unknown possibility 04 新宿眼科画廊／東京
YASMArt ギャラリー色彩物語／東京

絵具を紡ぐ絵画

朝は、朝食を取らない。仕事場であるアトリエに向かう。着いたら、コーヒーを一杯飲んでから仕事を始める。アトリエの壁や床は白で統一されており、壁の両側には棚がある。棚の中には、フランスやイギリス、世界各地から厳選され集められた糸や布、ボタンや小物でびつしり埋まっている。まるで宝箱をひっくり返したような、様々な美しいものがいっぱいの棚だ。

アトリエの中央には大きなテーブルがあり、何人のスタッフが仕事をしている。窓側と反対の壁側にはミシン机がある。そ

の横にはトルソーがあり、作りかけの洋服を着せられている。パーテーションには、次のコレクションで使われる布のサンプルとデザイン画が貼られている。このような空間でスタッフと服作りに励む。次回のコレクションに向けて準備に忙しくしている。

午後、遅い昼食を取りに一人レストランに向かう。昼食後はアトリエに向かい、仕事を再開する。8時くらいに、仕事が一段落する。

私は、もう一つのアトリエの扉を開ける。ここは、秘密の部屋で、中で何が行われているかは誰も知らない。

ここには、たくさんの芸術の本と、イーゼルと油絵の道具がある。年季の入った筆や、パレットもある。モチーフの位置を確認し、絵筆を取る。

12時くらいに家路つき、帰つて寝る前には、明日着る服のコーディネイトをしてから寝る。

秘密のアトリエで誰に見せる訳でもなく描いた油絵が、きっと私が本当に描きたい絵だろう。



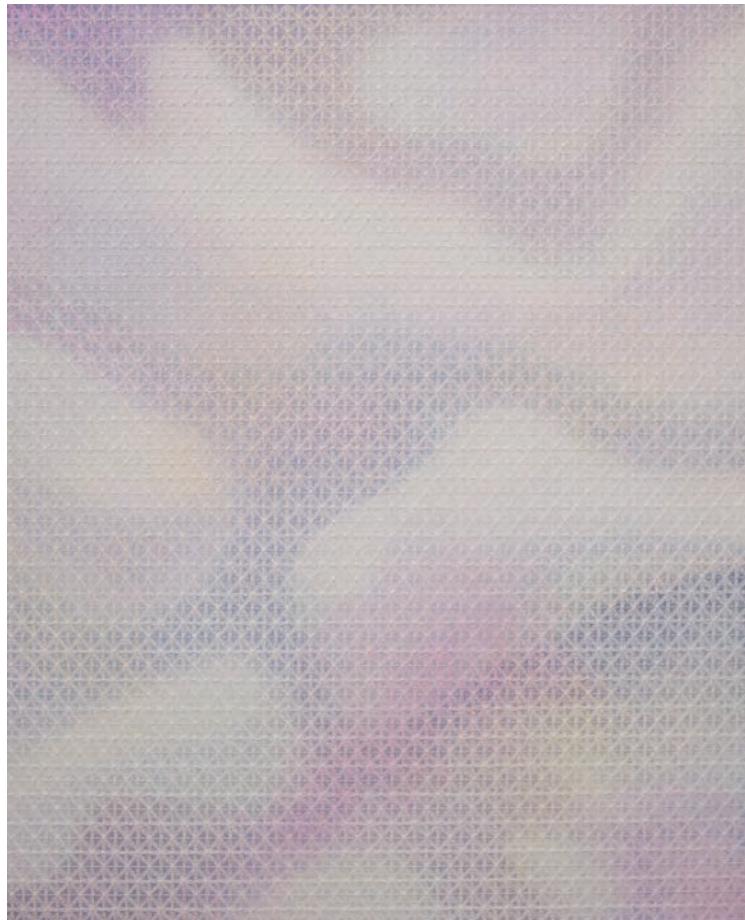
Untitled

キャンバス、油彩、布、リボン、コピー用紙

65.2×102.0cm

2013年

photo by 加藤 健



Tartans
キャンバス、油彩
162.0×130.3cm
2011年

高畠依子

1982年 福岡県生まれ
2008年 多摩美術大学絵画科油画専攻卒業
2012年 Royal Academy of Arts - 王立芸術学院 - (ロンドン) 交換留学
2013年 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了
東京藝術大学大学院美術研究科博士課程美術専攻在学中

個展

2009年 「I like it.」 ギャルリー東京ユマニテlab／東京

グループ展他

2013年 アートアワードトーキョー丸の内2013 行幸地下ギャラリー／東京
「TRICK-DIMENSION」 TOKYO FRONT LINE TOLOT(heuristic SHINONOME)／東京
2011年 東京藝術大学取手校地アートバス2011-こころゆれる- 東京藝術大学取手校／茨城
2010年 DANDANS at No Man's Land 旧フランス大使館／東京

茅根賢一

CHINONE Kenji

記憶／記録／絵画

例えば、幼い頃に家族で出掛けた記憶を振り返る。そこでなにをやったか、どんな出来事があつたのかということよりも、ぼんやりではあるが河原や植物園といった景色、家族の姿、そして自分の姿といったイメージが再生されていく。待てよ、あれ、おかしいな、なんで自分の視界に自らの姿が映っているのだろう。しかもあどけない顔でピースしているような気もする。そうか、これはあの時撮ってもらつた写真から再生されている光景なのか。

観光地を訪れた時、有名人に会つた時、珍しいものを見かけた時、友人と集まつた時、目の前に存在するものをじっくりみるとことよりもまず先にデジタルカメラや携帯電話で撮影を行なつている姿をよく目にす。ある国際的な芸術祭を訪れた時も、多くの人々が目の前にある作品を鑑賞するよりも先に撮影を行つていた。

記憶というものは時間が経てば薄れるものであり、それは避けようのないことである。そして、人が写真を撮るという行為は、記憶の傍さに対する抵抗のようにも受けとることができる。思い出を持ち帰り、他人

に披露する時に、それを自らの言葉のみで伝える人が、今の時代にどれだけいるだろうか。直接、己の肌で感じた記憶は、写真に映し出された映像にいつのまにかすり替えられ、再生していくのだろう。記憶とともに記録は呼び起こされる。その逆も然り。

また、「記憶を他人に披露する」という環境も近年になつて急速に整備されてきた。個人の意思で友人、知人はもちろん世界中の様々な人に向けて文章や画像、映像等を発信できるシステムにより、多くの人々が各々の思い出を披露し、共有することが可能になつたのだ。遭遇、記憶、思い出を披露し、共有する為に、写真や動画等をアップする人が後を絶たない今、他人の視界すら己の記憶の一部になりかねない。

記憶を描くために記録を見るという行為を描く。

記録から再生される記憶の映像を留めるために。

テーマパーク、公園、お祭り、交差点。

様々な場所での光景が私の作品の資料となつて いる。もちろん個人的な記録もあれば、動画投稿サイトから流れてきた映像のよう にそうでないものもある。しかし目に飛び込んできた映像として、そのどちらも記憶に刻まれるものであることには変わりはな い。情報化社会の現代においては、当事者でなくとも間接的に社会の出来事と関わることになるし、離れた場所でも娯楽を追体験することができるからだ。

実際にプライベートで足を運んだ野外フェス も、ユーストリームの向こうで行われて いるデモも、ある日の学生運動も、どこか の国のお祭りも、記録がどんな媒体であろ うと絵画の上では素材やその規則に従つて 平等に扱われることになる。そして、それ は観る者に対しても同様のことである。キヤンバスに描かれた図像は、誰かの記憶の断 片へと繋がっていくだろう。

そんなことを考えながら制作しております す今日この頃は。



Crossing
キャンバス、油彩
130.3×162.1cm
2012年



Peep

キャンバス、油彩

91.0×116.7cm

2011年

茅根賢二

1986年 茨城県生まれ
2009年 茨城大学教育学部学校教育教員養成課程美術選修卒業
2012年 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻洋画領域修了

個展

2011年 TWS-EMERGING 2011 「Melting scene」 トーキョーワンダーサイト本郷／東京

グループ展他

2012年 ART+CRAFT exhibition ギャラリーシのざき／茨城
清須市第7回はるひ絵画トリエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知
筑波大学大学院博士前期課程芸術専攻 修士制作展 茨城県つくば美術館／茨城
2011年 MC展 茨城県つくば美術館／茨城（'10）
2010年 ミニアチュール2010 ART WORKS GALLERY／茨城
via art 2010 シンワアートミュージアム／東京
lug 池田傑×茅根賢二 Galerie SOL／東京
トーキョーワンダーオール公募2010入選作品展 東京都現代美術館／東京
tri. 茅根賢二×吉田拓×栗田成己 Nobu's Gallery & Cafe／茨城
2009年 芸大・茨大・筑波大卒業修了制作選抜展 東海ステーションギャラリー／茨城
第57回茨城大学教育学部美術科卒業研究展 茨城県立県民文化センター／茨城
2008年 4accidents case4 金田幸三×茅根賢二 水戸のキワマリ荘内roots gallery／茨城
2006年 はこてん セントラルビル内C5ギャラリー／茨城

制作について

大学に入るまで全く興味の無かつた『美術』という世界に飛び込み、自分自身がその中で何が出来るかを、ずっと模索し、苦しみ、歓喜をあげ、自分が何を求めるかがしたいか、この想いは23歳になり、少しだけ確かな物が見えた。

過去は、アートのためにアートをしている状態であったが、今はそうでは無い。そんな物は糞食らえ。

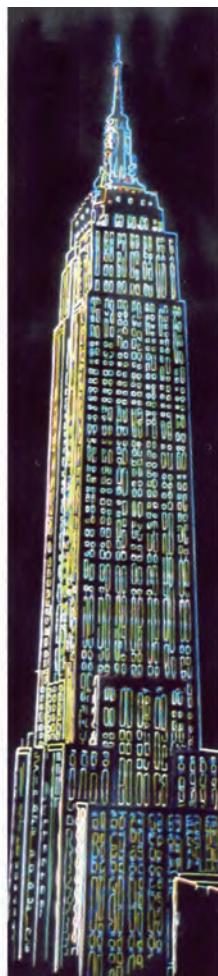
見知らぬ人には言えない、波乱万丈な自身の人生、死生観を自己の中で明文化し、それを白い画布に解放し、還元することにより、ある種、自分なりの経典を作り上げる。

今、社会という流動に身を投じ、自分自身の全てのエゴイズムを捨てる事で、それは人生を逸脱し、突き抜けた悟りにも似た、新たな価値観から観測したリアリティがあると信じている。



symbol sign (展示可変)

パネル、アクリル、
ポスターカラー、インク
各130.0×30.0cm
2010～2011年



豊島 尚

1988年 香川県生まれ

2011年 多摩美術大学絵画学科油画卒業

多摩美術大学大学院美術研究科油画入学

個展

2012年 GALLERY CN／神奈川

グループ展他

2012年 清須市第7回はるひ絵画トリエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知

2011年 0 and + 展 TURNER GALLERY／東京

2010年 三位一体！？キラキラ夏祭り★ バンビナートギャラリー／東京

viaart 2010 シンワアートミュージアム／東京

2008年 viaart 2008 EFD シンワアートミュージアム／東京

GEISA#12 東京国際展示場／東京

長谷川一郎

HASEGAWA Ichiro

最近自分の描いているものが「風景」であるということを強く意識しはじめた。以前は「風景を描いている」ということを、別に否定していたわけではないが、「風景を借りて○○を表現している」と言うことが多かつた。

しかし風景を用いて表現するその「○○」こそが、風景そのものなんじやないかと考えるようになつたのである。

風景とは、歴史の結果である。

歴史とは、人為的なものであろうとなからうと「この世で起こつた出来事」そのすべてである。

たとえば私の目の前に広がるこの風景。

この風景がこのようなカタチになつたのは、すべて要因があると言える。

その要因とは、自然現象であつたり、あるいは我々人類の営みであつたり、それらのことが複雑に絡み合つてできている。

この世で起こつたすべての出来事の結果に

よつて、私の目の前にはこのような風景が広がつてゐるのである。

そして今もまた、私の目の前を一筋の風が吹き抜けて、新たな風景を作り上げてゆく。

私の描く風景には、人類の営みと、それを受容する大きな自然とが対比して描かれている。あるいは、人類そのものが自然の一部だとも言うことができる。

私はそのような風景を通じて、人類を賛美しているのかもしれないし、批判しているのかもしれない。おそらくはその両方なのだと思う。

そして確実なこととして一つ言えるのは、私が人間であるという否定しようのない現実。それは喜ばしいことでも、嘆かわしいことでもないかも知れないけれど、事実として受け入れるより他はない。

それはつまり、私の視線も、私の思考も、私のすべては人間を越えることはないといふことを意味する。

人間として感じるこの風景を、どうせならば喜びの風景にしたいと願う。

世界が美しいのではない。それを美しいと感じることのできる心があつて初めて世界

風景の向こうへ

は美しいなるのだと思う。



Daydream beaver
キャンバス、アクリル
162.1×112.1cm
2012年



長谷川一郎

1978年 大阪府生まれ
2005年 京都嵯峨芸術大学芸術学部造形学科油画分野卒業
2007年 京都嵯峨芸術大学大学院芸術研究科修了

humanature
キャンバス、アクリル
64.5×135.0cm
2010年

個展

2013年 壱多美術館／奈良
2012年 Gallery Den mym／京都
2kw gallery／大阪
2011年 Watanabe Fine Art Gallery／大阪
2010年 2kw gallery／大阪
2009年 Gallery Den 58／大阪
2008年 Gallery Den／大阪
2007年 VOICE GALLERY pfs/w／京都
ギャラリーはねうさぎ／京都
Gallery Den／大阪
2006年 ギャラリーはねうさぎ／京都
2005年 Gallery Yamaguchi Kunst-Bau／大阪

グループ展他

2013年 京都府美術工芸新銳展～2013京都美術ビエンナーレ～ 京都文化博物館／京都
LA VOZ selected 小大丸画廊／大阪
2012年 LA VOZ EXHIBITION 京都市美術館別館／京都('07、'08、'09、'11)
尼崎・アート・フェスティバル 2012 尼崎市総合文化センター美術ホール／兵庫
高尾小フェス 旧高尾小学校／京都
思考する視線 Art Space MEISEI／京都
2011年 HANARART はならあと 今井まちや館／奈良
Worldmaking Exhibition of 5 versions 2kw gallery／大阪
まなざしの哲学—京都嵯峨芸術大学の40年 京都市美術館 館／京都
思考する視線 同時代ギャラリー／京都('09)
2010年 LA VOZ EXHIBITION 井上画廊／東京
2009年 PARTY LADS GALLERY／大阪('07)
2008年 冬景 Voice Gallery pfs/w／京都
= イコール ギャラリーはねうさぎ／京都
Visual Sensation vol.3 Gallery Den 58／大阪
2007年 one room 京都嵯峨芸術大学／京都
BOX美術館 ギャラリーはねうさぎ／京都('05)
The Asian Spirit & Soul Sungnam Art Center／ソウル(韓国)
2006年 アート de コレクター展 ギャラリーはねうさぎ／京都
2004年 ART CAMP in CASO 海岸通ギャラリー・CASO／大阪
むすんで ひらいて 京都市立嵐山小学校／京都
Dot 海岸通ギャラリー・CASO／大阪
2003年 sugarless ギャラリーみすや／京都
ART UNIV.2003 キャンパスプラザ京都／京都

新鮮で柔軟な感性

日常／非日常の間、無感覚／違和感の間に
ある意識に興味を持ちました。
生活に慣れる事／馴染む事は、人間の適応
能力であり、必要な本能です。しかし、そ
れを得ると同時に、人は敏感さや新鮮さを
忘れます。

ふと、日常の中から訴えてくるような何か
の感覚。その少しの違いを意識したとき、
日常のものが日常のもので無くなります。
私はその一瞬に惹かれます。

2004年筆

人は生きている中で、輪の様に繰り返す／
繰り返される事を感じています。しかし、
一つとして同じ場面、同じ状況はありません。
人は生きているのに重ならない形は、よく
渦巻きに例えられます。

2005年筆

る事です。それは客観的見方なのかもしそ
ません。自分の癖を人に指摘された時の感
覚と似ています。
暮らしの中で無数にある習慣に着目する事
は、私にとつてインスピレーションを与え
続けてくれるもの一つです。

2006年筆

私は普遍的な日常生活の一部をモチーフに
し、配列による画面の構成によつて油画を
制作しています。一見かけ離れて見えても、
実は内包する意味の近い複数のモチーフを
組み合わせる事により、意外な空間や風景
の表出を試みています。たとえ同じような
状況や時間が流れているように感じても、
厳密には同じ状況や同じ時間は流れていな
いように、日常は受け入れる自身の感じ方
で如何ようにも変化していきます。より柔
軟な思考や感性を持つ事で人は日常から多
くのものを得る事ができるでしょう。

2012年筆

暮らしの中で繰り返される習慣行動。それ
を思い返す事は、無意識な習慣を意識化す

私の制作過程は、まず一つのまとまつたイメージが脳裏に浮かぶと、それをとても小さな図でメモ描きします。それは人に見せられる様な物では無いのですが、数日経った際に見返したとしても、一瞬で同じイメージが脳裏に浮かびます。もし時間の経過とともに（広がりでは無く）変化し揺れ動く様ならば、それは弱いイメージであり、作品として発表しません。

イメージが決まつたら、どの様に表現し、どの様に完成させるか組み立て、工程を考えます。

一つの強いイメージを保ち続け、二ヶ月ほどかけて油画を完成させます。

制作期間中は多くの事を考えず、淡淡と完成へと向かいます。例え私的に辛い事や嬉しい事などの強い刺激があつたとしても、同じ姿勢で同じ筆を取る様に努力します。作品はぶれる事無く完成へと向かいます。その保ち続ける作品へ向かう姿勢が、私を成長させてくれます。



夫婦のとぐろ（展示風景）

麻布、油彩
890.0×97.0cm
2012年



連なり行く（展示風景）

麻布、油彩、アクリル

台形状357.0×125.0 (115.0) cm

2011年

古川あいか

1982年 愛知県生まれ

2008年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業

2012年10月～2013年9月 文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてドイツ滞在

個展

2012年 古川あいか壮行展 -夫婦のとぐろ- HIGURE17-15cas／東京

古川あいか壮行展 -家族の円環- DOKA Contemporary Arts／東京

古川あいか展 豊川市桜ヶ丘ミュージアム／愛知

2011年 古川あいか展 HIGURE17-15cas／東京

2007年 『以上でも以下でもないものはつまらない。展開していく搖れうごくものが面白いんだ。もしかしたら、そんな世代、そんな時代なのかもしれないけど。』 HIGURE17-15cas／東京

グループ展他

2013年1月、5月、9月 Spinnerei gallery tours in 2013 Spinnerei／ライプチヒ〔ドイツ〕 ('11)

2012年 LIA winter show LIA(Leipzig International Art Programme)／ライプチヒ〔ドイツ〕 ('10)

2011年 江古田ユニバース2011 ギャラリーフォレスト／東京

Artist in Residence スタジオプログラム BankART Studio NYK／神奈川

COLORS · 2011 KEY Gallery／東京('09、'10)

Slowenien liest in der Spinnerei(Open studios) LIA／ライプチヒ〔ドイツ〕

2010年 立石フェスタ2010 小林薬局 | 古川あいか 立石商店連合会 作品展示プロジェクト／東京

2009年 No Man's Land <MEMENTO VIVERE / MEMENTO PHANTASMA> 在日フランス大使館／東京

立石フェスタ2009 立石商店連合会 作品展示プロジェクト／東京

トーキョーワンダーオール公募入選作品展 東京都現代美術館／東京 ('08)

2007年 the SIX 2007－東京・神奈川6美大生総合展覧会－ 横浜赤レンガ倉庫／神奈川

三浦高宏

MIURA Takahiro

絵・空・事

私は影や映り込みなど、対象の周辺で起る現象に興味があり制作をしている。その現象には、対象の多様性、多面性が大きく反映されていると考えているからだ。そして、現象と対象の間には、夢と現実、存在と不在、といった二面性だけではなく、新たな一面がおぼろげながら見えてくる。そのため一面を油彩を用いて作品化し、言語化できない「なにか」に触れたいと思う。

そして私は、絵画というものは、「絵に描いた餅」にすぎないと考えている。ただし、その「絵に描いた餅」は見た人の食欲に影響を与える力を持つことが出来る。嘘である「餅」が力を持つ。

その力を強くしてくれるのは、材料と技法だ。

そして私は、絵画というものは、「絵に描いた餅」にすぎないと考えている。ただし、その「絵に描いた餅」は見た人の食欲に影響を与える力を持つことが出来る。嘘である「餅」が力を持つ。

長い歴史の中では培われてきたグレーベン、パスト、スカンブリングといった古典技法の数々。そして古典技法は作品が長い年月を耐えきれるだけの材料の知識も含まれている。

これらの組み合わせたや、現代の道具や素材を利用した私独自の技法を用いながら作り上げることができる絵肌によって、「絵に描いた餅」はただの画像ではない、「絵画」になれる信じている。

ウムの多様性。メディアの屈折率による色彩の透明感と憂いを帯びたツヤ。乾燥をコントロールすることで可能な画面上での混色。

その多様性は、パソコンの画像処理ソフトウェアのそれよりもはるかに複雑で多い。

油彩における顔料の強い存在感。粘り気のあるメディウムによつてつくられる筆致。酸化や蒸発という違ったメカニズムの乾燥方法を同時にあつかうことができるメディ



瓶と赤子

パネル、エマルション地、油彩

53.0×45.5cm

2013年

二重身
パネル、エマルジョン地、油彩
162.0×97.0cm
2011年



三浦高宏

1978年 岩手県生まれ
2004年 東京藝術大学絵画科油画卒業
2006年 東京藝術大学絵画科油画技法材料研究室修了

個展

2012年 ギャラリー彩画堂／岩手
2010年 ギャラリー彩画堂／岩手
2009年 ワダファインアーツ／東京

グループ展他

2012年 MITSUKOSHI×東京藝大「夏の芸術祭-次世代を担う若手作家作品展」 日本橋三越／東京 ('11)
はるひ絵画トリエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知 ('09)
2011年 アーティクル賞入選者展覧会 TURNER GALLERY／東京
2010年 粟島アーティストインレジデンス2010オータム成果発表展 粟島／香川
デジタルオイルペイントィング展 東京藝術大学美術館／東京
2009年 アートアグネス2009 アグネスホテル／東京
2007年 Kunstakademie Münster Institution Klasse Klaebe im Finanzamt Muenster-innenstadt 2007 ミュンスター [ドイツ]
2005年 Reflex-黄金背景テンペラ模写と現代における展開・構築 東京藝術大学美術館陳列館／東京

内なることは

私は『ヒトの心の内側に隠れているもの』を自らのテーマとしている。

ヒトは誰もが、言葉や行動で表現している。その姿が正直な自分でいいながら、その反面、密かに別の考えを持ち、外面とは違う自分を心の中に持っているものであり、全ての言葉が本音というわけではない。

ヒトに会った後の印象や記憶は色として残る。その人が語った言葉や、行動よりも強く印象に残つたものだ。その記憶は写真のようにフレームに入つてしたり、縁取られたりはしていない。その人の周りはぼんやりとしている。その人の色はぼんやりとして、背景までハッキリとは映し出されない場合が殆どである。それは、時間と共に曖昧な映像となり、全体に色のみで記憶されていくことが多い。私はその色こそが、目に見えず、耳に聞こえなかつたその人の別の一面であると考へている。

「口の利ける者は、自分でお腹が減つた、頭が痛いといえるからいい。口の利けないものは、どこか痛くてもいえずに我慢しているかもしないから、よく見て耳を貸してやらなくてはいけないよ。」

これは鶏に抱かせていた卵が、母鶏の糞に

まみれて息ができなくなるといけないからと、その卵を洗つてまた母鶏のハラの下にそつと返してあげていた祖母が、子供の頃から生き物を育てるのが好きだった私にいつた言葉だ。小さな私には、ただ、「生き物を飼つた者の責任として世話をきちんとなさい」といつているのだ、と思っていたが今はそれだけだとは思つていない。

何もないわい卵も、中では何かを考え訴えている。ヒトは欲求や不満を言葉に出して伝えることができるけれど、心の内側には外側には出せない別の言葉がある。私は耳を貸すことできを感じ、映し出された色の残像を描こうとしている。



release

布、アクリル

右 : 330.0×400.0cm

左 : 220.0×290.0cm

2012年

photo by 福岡 栄

staying in the mind

布、アクリル

400.0×500.0cm

2011年

photo by 豊七



三井園子

1969年 岐阜県生まれ

1992年 名古屋芸術大学美術学部絵画科洋画卒業

個展

2013年 **極小美術館／岐阜(池田町) にて6月9日～8月31日迄開催予定**

2012年 ガレリア フィナルテ／愛知

2011年 コバヤシ画廊／東京

2010年 ガレリア フィナルテ／愛知

2009年 コバヤシ画廊／東京

2008年 ガレリア フィナルテ／愛知

2007年 北ビワコホテル グラツィエ ギャラリー／滋賀

2006年 コバヤシ画廊／東京

ガレリア フィナルテ／愛知

Studio Open／サウスカロライナ[アメリカ]

2004年 コバヤシ画廊／東京

ガレリア フィナルテ／愛知

the:artist:network／ニューヨーク[アメリカ]

2002年 ガレリア フィナルテ／愛知

コバヤシ画廊／東京

2000年 ガレリア フィナルテ／愛知

コバヤシ画廊／東京

1998年 ガレリア フィナルテ／愛知

1996年 ガレリア フィナルテ／愛知

グループ展他

2012年 Billboard Painters Exhibition Galleri NB／ビロー[デンマーク]

Viborg International Billboard Painting Festival ビロー[デンマーク]

2011年 Emerging Art from Japan & Around Scandinavia 2011 横浜赤れんが倉庫／神奈川

池田山麓現代美術展 -宇宙の連環として- 極小美術館／岐阜

2010年 池田山麓現代美術展- ベスバ・ブリマベーラと作家たち- 極小美術館／岐阜

2009年 International Workshop for Visual Artists in REMISEN-BRANDE ブランデ[デンマーク] ('01)

2008年 飛驒高山現代美術展2008 -里山と現代美術- ギャラリー遊朴館／岐阜

2006年 北ビワコ現代美術展 北ビワコホテルグラツィエギャラリー／滋賀

形式と拓展 中央美術学院美術館／北京[中国]

2004年 それぞれの空間表現 岐阜県美術館／岐阜 ('95～'97、'99～'03)

2003年 岐阜内モンゴル美術展 内蒙古美術館／内モンゴル自治区[中国]

2002年 Cite Internationale des Arts パリ[フランス]

VILNIUS PLENERAS 2002 Church of St. Catherine／ヴィルニス[リトアニア]

Japan at this moment Galerija Vartai／ヴィルニス[リトアニア]

宮木沙知子

MIYAKI Sachiko

空間認識

私の制作のテーマは、「人が作品というものを意識する時、何を基準に一つの物体として存在しているものを作品として意識するようになるか」という疑問を紐解いていくことです。

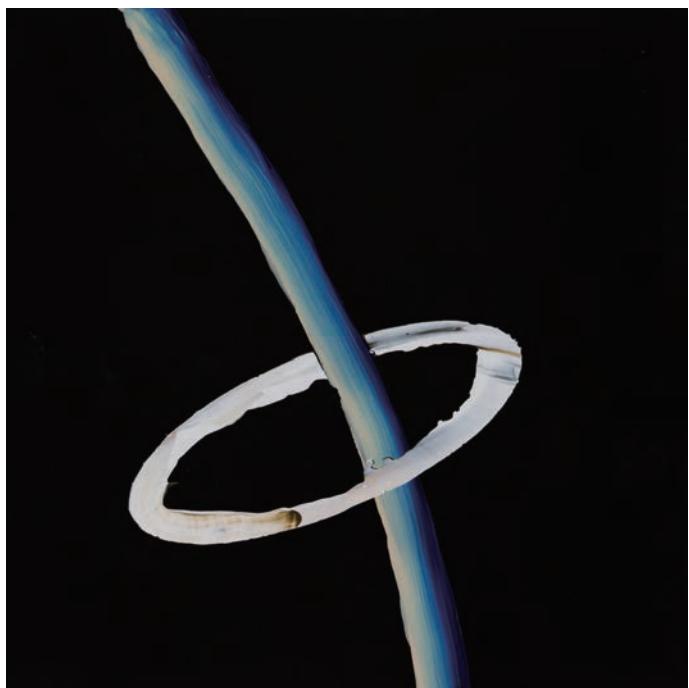
この疑問を解くカギとして、『空間』という要素をピックアップして考えています。

例えば、単なる物体であるヤンバスを「これは作品です」といくら説明しても、物体としての意識が強く、作品として意識することは難しいと思われます。しかし、そのヤンバス上に一定の空間を作り出すことで、空間が振動し、作品として意識されるのではないかと考えています。

ただ、理論的に作品を作り上げてしまうと、作品を感覚的に見るということが難しくなってしまいます。そこで、私は常に感覚的に鑑賞できる要素を、作品の中に意図的に含ませています。

絵の具の流動的な表情を作品の中に放り込むことで、理論的に作り上げた作品を感じ的に鑑賞することができ、無意識の中に「作品とは何なのか？絵画とは何なのか？」という疑問を投げかけることが出来る思考

えています。



斜めへの空間
パネル、アクリル
30.0×30.0cm
2012年

重なる空間
パネル、アクリル
162.0×130.5cm
2011年



宮木沙知子

1985年 青森県生まれ
2010年 女子美術大学絵画科卒業
2012年 女子美術大学大学院美術研究科修士課程修了

グループ展他

2012年 TURNER AWARD 2011 TURNER GALLERY／東京
神奈川県美術展 神奈川県民ホールギャラリー／神奈川('11)
2011年 神戸ビエンナーレ2011フォトコンテスト 神戸ハーバーランド・ファミリオ／兵庫
上野彦馬賞-九州産業大学フォトコンテスト 東京都写真美術館、九州産業大学美術館、北海道東川町文化ギャラリー、福岡市美術館、長崎県美術館、鹿児島市立美術館／東京他巡回

描き始める時、重要なことはモチーフの選択です。

それは感覚的に選択されます。小さな物であつたり、風景の中にあるものであつたり、大概は何でもないものです。もちろん、

そのモチーフというものは絵の作りそのものから得られる場合も多々あり、一本の線であつたりそれによって変わる平衡感覚であつたり様々です。そしてそれを執拗に見、考え続けることによって、そこから感情の起伏の原因を見つけ、現実問題と照らし合せ合致させる。これがうまくいった場合、絶対に描きたいと思う。

描き進めるにあたって、気を使うことは絵の具の質感です。

鈍感な絵の具たちでは、この「合致」が絵の中でうまくいくことはとても難しい。そもそも、この「合致」自体が非常に繊細で、ともすれば独りよがりな考え方から起こっていると言われても仕方がない場合も多いので、絵の具という外の価値観と共通点を持つ物に神経をとがらせるのは当然と言えば当然なのかもしれません。

このよう描かれた絵でも、見る人と絵の

間に私の知らない事実が生まれ、常に更新され続けることが一番重要です。なので、以上のことは忘れてそれは一生懸命描こうと思います。



untitled
キャンバス、油彩
160.0×140.0cm
2013年



untitled
キャンバス、油彩
145.0×130.0cm
2010年

山路紘子

1983年 三重県生まれ
2006年 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2008年 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展

2013年 NANZUKA／東京
2012年 gFAL武蔵野美術大学／東京
2010年 NANZUKA UNDERGROUND SHIROKANE／東京
2008年 鶴游舎ギャラリー（重盛守道家住宅）／三重
2007年 Gallery b.tokyo／東京

グループ展他

2012年 3artists show <Hiroko Yamaji, Daniel Schubert, and Stephan Ruderisch> Galerie Gebr.Lehmann／ドリステン [ドイツ]
VERLANGSAMTE PERFORMANCE CURATED BY WILHELM SCHURMANN Van Horn／デュッセルドルフ [ドイツ]
2011年 所沢ビエンナーレ／埼玉 ('09)
2010年 -scape NANZUKA UNDERGROUND SHIROKANE／東京
2008年 ART AWARD TOKYO 行幸地下ギャラリー／東京
群馬青年ビエンナーレ2008 群馬県立近代美術館／群馬

山田優アントニ

YAMADA Yu Anthony

自身の制作と平行して父のアトリエで肖像画を描いている。

祖父の代から続いて肖像画業を営んでいる父のもとに生まれた私にとって、それは自然なことなのかもしれない。

しかし、今まで私は父の仕事を手伝つたり、ましてや家業を継ごうという意思もなかつた。

私が描く絵画と父や祖父の描く肖像画との間には大きな隔たりがある。ずっと、そう思い込んでいたからだ。

肖像画の仕事を手伝うきっかけは父の病気だった。

大事には至らなかつたものの、もしものことを考えた父は、私に肖像画業のノウハウを学ぶよう進めた。

注文客から受け取つた顔写真に希望の服装を組み合わせ、希望の素材で希望の大きさに描く。

「肖像画を描くうえで一番重要なのは写真に似ていることだ」と父は強く言つた。

正確に写した下図の上に計画的に油絵具をのせていく。それは画家というよりも職人

の仕事のようだつた。

私は今、自身の制作としても人物画を描いている。

私が描いているのは自画像だ。しかし、そこに描かれてる人物の姿形は私とは違う。彼らは私の持つきままな記憶、経験、感情を擬人化したキャラクターであり、私の分身である。もちろん写真や資料も使わないし、下図もとらない。

表層を描くことでつくられる肖像画。

その表層を剥ぎ取り、内面を描くことでつくられる肖像画。

これら相反する二つの肖像画を同時に描き進めていくことで、どのような効果が生まれ互いにどのような影響があるのか、まだはつきりとは分からない。

私が最初に感じた大きな隔たりは本当に存在しているのかもしれない。

でも今は敢えてその隔たりの中に身を置き、自分の目でその溝の深さを確かめるべきな

ふたつの絵

のではないか。
きつといつかは向き合わなければいけない
ことなのだから。



scene

キャンバス、油彩

193.9×259.1cm

2012年



wedding
キャンバス、油彩
145.5×145.5cm
2011年

山田 優アントニ

1987年 静岡県生まれ
2010年 愛知県立芸術大学美術学部美術科油画専攻卒業
2012年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻油画版画領域修了

個展

2011年 ギャラリー16 [APERTO]／京都

グループ展他

2013年 トーキョーワンダーウォール公募2013入選作品展 東京都現代美術館／東京
ワンドーシード2013 トーキョーワンダーサイト本郷／東京
2011年 超京都 東本願寺涉成園／京都
佐藤国際文化育英財団第20回奨学生美術展 佐藤美術館／東京
2010年 アートアワードトーキョー丸の内2010 行幸地下ギャラリー／東京
via art 2010 シンワアートギャラリー／東京

山根一晃

YAMANE Kazuaki

サイゴンのマイク・エインツ

“つくりごととしてバレバレとしていること”
まだ僕が学生だった頃、知り合いの画家に
そう言わされたことがある。文章としての成

り立ち 자체に問題のあるこの言葉はその当
時の僕を少なからず困惑させた。描かれた
ものは、その善し悪しに関わらず何かしら
真実があると思っていたし、それは至極もつ
ともなことだと思っていたからだ。けれど、
絶対的な正義が存在しないように、真実と
いう言葉もその内に虚偽を秘めている。あ
れから数年経つた今も僕の頭の端には、未
だにその言葉が残っている。

“つくりごととしてバレバレとしていること”

僕が最初に美術に興味をもつたのはマイ
ク・エインツ (Mike Aynsze 1918 ~ 1986)
というドイツ系イギリス人の日曜画家に出
会ってからだ。小学生の頃、デパートの催
し会場で彼の絵を見る機会があつた。その
時に買った絵はがきは、今も僕のパソコン
台の後ろの壁に貼つてある。大学に入つて
から彼について散々調べようとしたが、出
生と数枚の絵しか見つけることが出来なかつ
た。けれど彼の絵は他の凡庸な日曜画家と

は明らかに一線を画していた。少なくとも
僕の中では。

「人は良人であろうとして愚劣な結果を生
む」四年前に死んだ祖父はことある度に僕
にそう言い聞かせた。彼は早いうちに両親
を流行病で亡くし、僕にとつて高祖父にあ
たる人物によつて育てられた。この時代に
青年期を迎える誰もがそうであつたように
祖父も戦争にかり出され、特殊技能兵とし
てジャワ島やルソン島を経てインドシナ半
島のサイゴンで終戦を迎えた。従軍中は幸
運なことに戦闘などといったものにも遭遇
することはなかつたようだが、郷里の広島
の地に帰つて来た時、どうしようもない絶
望感に襲われたそうだ。そこにはもはや彼
の知つていた街並はどこにもなく殺伐とし
た焼け野原が見渡す限り続く廃墟だった。
その後、祖父は人生の多くの時間を珈琲を
淹れることに費やした。一日に何十杯もの
珈琲を淹れ、ほぼ休みなく30数年もの間、
それは続けられた。

力道山やオリンピックがテレビの中で賑わつ
た時代、アメリカから取り寄せたテレビを

設置した祖父の店は大いに流行ったようだ。僕には祖父のそうした姿はなぜかとても高潔のものに映つたが、それはベルトコンベアーで行なわれる工場でのルーティーンワークにも見えた。

自分の実体験を探していくことが、現在を生きる僕に与えられた道の一つだ。

そんな祖父の人生を僕は今、物語として知ることが出来る。また多くの史実を『歴史』として捉えることが出来る。けれどそれは、彼らが大地を這い、泥だらけになりながら必死に生を繋いだ彼ら自身の実体験としてのものでは決してない。僕にとってそれは誰かによって語られ、作られたフィクションでしかないのだ。例え、偽りようのない事実であつても。事実を歴史として眺める者にとって、「現実に起こつたこと」は「起こつたかもしれないこと」とそう違いはない。現実と虚構という二項対立がもはや何の意味も持ち得ないようにな。



白痴・逃亡
壁面にアクリル、鉄
サイズ可変
2012年



Jumper

キャンバス、布、紙、ラッカー、油彩

130.3×194.0cm

2011年

山根一晃

1982年 広島県生まれ

2008年 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業

2010年 東京造形大学大学院造形研究科造形専攻修了

グループ展他

2012年 Angelika Open 2012 Angelika Studios／ロンドン [U.K.]

2010年 UK ECKA 2010 SAVREMENA GALERIJA (アーティスト・イン・レジデンス)／[セルビア]

2009年 アウトレジン2009 文房堂ギャラリー／東京

ASIAF soul／ソウル [大韓民国]

<http://www.yamanekazuaki.com>

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊2013

発行日 2013年7月1日発行
定 価 1,000円 (本体953円)
発行所 ホルペイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
発行人 吉村信夫
編 集 倉田妙子

